

【平成28年度第2四半期】学術フォーラム及び土日祝日に講堂を使用するシンポジウム等について（提案12～18）

1. 日本学術会議主催学術フォーラム

- ・経費負担を要するものは、原則として年間10回程度
※既に1件決定済（第1四半期開催分）
- ・経費負担又は職員の人的支援を要するものは、四半期ごとに計3件まで
- ・土日祝日開催のものは、四半期ごとに2件まで

	提案番号等	テーマ	開催希望日時	開催場所	経費負担	職員の人的支援
1	提案12 【P.3～4】	若手生命科学研究者のキャリアパスについて考える：卓越研究員制度の現状と未来、そしてさらなる可能性	9月12日（月）	東京大学本郷キャンパス小柴ホール	要	要

2. 土日祝日に講堂を使用するシンポジウム等

- ・各年度32回まで（土日祝日開催の日本学術会議主催学術フォーラムを含む）
※既に3件決定済（第1四半期開催分）（日本学術会議主催学術フォーラムを含む）
- ・四半期ごとにおおむね8回（土日祝日開催の日本学術会議主催学術フォーラムを含む）

	提案番号	テーマ	開催希望日時	主催委員会等名
1	提案13 【P.5～6】	日本の公教育システムの再構築—教育の公正の視点から	7月2日（土）	心理学・教育学委員会公正原理を重視する公教育システムの再構築分科会
2	提案14 【P.7～8】	『権利』を解剖する：基礎法学の新地平（仮題）	7月9日（土）	法学委員会
3	提案15 【P.9～10】	学問の消滅と生成の系譜学：現場から融合とは何かを考えるために	7月10日（日）	若手アカデミー若手による学術の未来検討分科会
4	提案16 【P.11～12】	高等学校新設科目『公共』にむけて——政治学の立場から	7月23日（土）	政治学委員会
5	提案17 【P.13～14】	自己を知る脳・他者を理解す	9月10日（土）	心理学・教育学委員会脳と意

		る脳～融合的アプローチによる社会脳研究の魅力（仮題）		識分科会、基礎医学委員会神経科学分科会、臨床医学委員会脳と心分科会
6	提案 18 【P. 15～16】	昆虫の社会と行動	9 月 25 日（日）	心理学・教育学委員会・基礎生物学委員会・統合生物学委員会合同行動生物学分科会、農学委員会応用昆虫学分科会

注： 職員の人的支援はなし。

(提案 1 2)

日本学術会議主催学術フォーラム「若手生命科学研究者のキャリアパスについて考える：卓越研究員制度の現状と未来、そしてさらなる可能性」の開催について

1. 主 催：日本学術会議

2. 日 時：平成 28 年 9 月 12 日（月）13:00～17:00

3. 場 所：東京大学本郷キャンパス 小柴ホール

4. 開催趣旨：

わが国における若手研究者層の要請及び拡充を図るため、平成 7 年に第 1 期科学技術基本計画の一環として施行された「ポスドク 1 万人計画」の当初の数値目標は平成 11 年に達成されたものの、その上昇は留まるところを知らず、現在、ポスドク人口は 1 万 6 千人を超える。一方で、大学の若手教員数や、企業における博士取得者の採用数に伸びはみられず、ポスドクの正規雇用は不足の一途をたどり、彼らは行き場所を失っている状況にある。この社会的葛藤ともいえる状況は学生の進路決定にも負の影響を与えており、我が国の科学技術立国としての将来には暗雲が漂う。

国際的に優れた研究成果やイノベーションの創出を目指し、博士号取得者がその能力を発揮する、また、生命科学者を将来のキャリアパスとして魅力あるものとするために、我々が今とるべき戦略とは何か。優れた研究者が、産学官の機関や分野の枠を越えて、独創的な研究に専念できる環境を整備することを目的として、今年度より施行された「卓越研究員制度」の実態を共有するとともに、より効果的な運用の可能性を探る場とする。

5. 次 第：

総合司会

塩見美喜子（日本学術会議第二部会員、東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻教授）

13:00-13:10 はじめに

中野 明彦（日本学術会議第二部会員、東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻教授）

13:10-14:50 講演

小林 武彦（生物科学学会連合ポスドク問題検討委員会委員長、東京大学分子細胞生物学研究所教授）

「ポスドク問題の何が問題か」（仮）

文部科学省科学技術・学術政策局人材政策課（調整中）

「卓越研究員制度の現状と今後」（仮）

八代裕一郎（株式会社アカリク執行役員）（調整中）

「生命科学の知恵の流通を最適化するには」(仮)

産業界関係者(調整中)

福田 裕穂(日本学術会議第二部会員、東京大学大学院理学系研究科長)

「我が国の生命科学研究の未来を見据えて」(仮)

14:50-15:10 休憩

15:10-16:55 パネルディスカッション

司会

中野 明彦(日本学術会議第二部会員、東京大学大学院理学系研究科生物
科学専攻教授)

パネリスト 講演者全員

16:55-17:00 おわりに

福田 裕穂(日本学術会議第二部会員、東京大学大学院理学系研究科長)

(提案 13)

公開シンポジウム「日本の公教育システムの再構築－教育の公正の視点から」の開催について

1. 主 催：日本学術会議 心理学・教育学委員会 公正原理を重視する公教育システムの再構築分科会
2. 共 催：大阪大学博士課程教育リーディングプログラム・「未来共生」プログラム、一般社団法人日本教育学会、日本教育社会学会、日本教育行政学会、日本比較社会学会（4学会はいずれも交渉中）
3. 後 援：なし
4. 日 時：平成 28 年 7 月 2 日（土）13：30～17：00
5. 場 所：日本学術会議講堂
6. 分科会の開催：開催予定あり

7. 開催趣旨：

格差社会の進展の下で、日本の公教育システムの意義が問い直されている。その改善のために今日主として採用されているのが、競争原理や成果主義を中心とする新自由主義的な改革手法である。そこでは、もっぱら教育の「卓越性」(excellence) が取り沙汰され、教育の「公正」(equity) の原則は等閑視されがちである。

本シンポジウムでは、そうした問題状況を背景に、教育を受ける一人ひとりのニーズに応じた教育を保障する「公正原理」を重視した公教育システムのあり方を再検討してみたい。具体的には、「格差」や「貧困」や「社会的排除」といった現代的な諸課題に対して、有効な手立てとなりうる教育の制度・内容・方法の抜本的な検討を行い、具体的な提案に結びつけたい。

8. 次 第：

司会 竹下 秀子*（日本学術会議連携会員、滋賀県立大学人間文化学部教授）

13：30 趣旨説明

竹下 秀子*（日本学術会議連携会員、滋賀県立大学人間文化学部教授）

13：40 「教育政治学の視点から」（仮）

小玉 重夫*（日本学術会議第一部会員、東京大学大学院教育学研究科教授）

14 : 10 「教育社会学の視点から」 (仮)

志水 宏吉* (日本学術会議第一部会員、大阪大学大学院人間科学研究
科教授)

14 : 40 「教育行政学の視点から」 (仮)

大桃 敏行* (日本学術会議連携会員、東京大学大学院教育学研究科教授)

15 : 10 休憩

15 : 25 コメント「教育の歴史の視点から (仮)」

広田 照幸 (日本学術会議連携会員、日本大学文理学部教授)

15 : 40 コメント「国際比較の視点から」 (仮)

北村 友人* (日本学術会議連携会員、東京大学大学院教育学研究科准
教授)

15:55 パネルディスカッション「日本の公教育システムの再構築に向けて」

17 : 00 閉会

9. 関係部の承認の有無：第一部承認

(*印の登壇者は、主催分科会委員)

(提案 14)

公開シンポジウム『『権利』を解剖する：基礎法学の新地平』（仮題）の開催について

1. 主 催：日本学術会議法学委員会、基礎法学系学会連合（日本法社会学会、日本法哲学会、比較法学会、法制史学会、比較家族史学会、民主主義科学者協会法律部会）
2. 共 催： なし
3. 後 援： なし
4. 日 時：平成 28 年年 7 月 9 日（土）13 時～18 時
5. 場 所：日本学術会議講堂
6. 分科会の開催：開催予定なし
7. 開催趣旨：

法学の根幹をなすのは「カテゴリーの輪郭を画して一定の効果を配当する」営為であるが、細部は分節された文脈に沿って精密さを増してゆく一方、文脈が複雑に分岐し多様性を増す中で、基礎概念の輪郭は案外に鋭さを欠くことがある。「権利」もその一例である。

本シンポジウムでは、現代日本とは異なる仕組みの上で観察される「権利に近いもの」を、どのような条件によって「権利」と同定し、或いは区別しうるか、という法制史学からの問題提起を受けて、比較法学・法社会学・法哲学など基礎法学諸分野の研究者が様々な角度から切り込み、基礎法学的研究の新たな地平を拓くとともに、その成果を広く社会・市民に還元することを目指す。
8. 次 第：（報告題名はいずれも仮題）
 - 13：00 開会挨拶
小森田秋夫*（日本学術会議第一部会員、神奈川大学法学部教授）
 - 13：05 企画趣旨説明
新田 一郎（東京大学大学院法学政治学研究科教授）
- 第 1 部 報告
 - 13：20 日本近世における「裁判」制度の確立とその限界：日本法制史から
坂本 忠久（東北大学大学院法学研究科教授）
 - 13：50 「権利」について考えるためのさまざまな視座：比較法学・比較法史学から
海老原明夫（東京大学大学院法学政治学研究科教授）

14：20－14：30 （ 小休憩 ）

14：30 資源配分システムとしての「権利」の形成：法社会学から
飯田 高（東京大学社会科学研究所准教授）

15：00 権利は存在するか：法哲学から
大屋 雄裕（慶應義塾大学法学部教授）

15：30－15：50 （ 休憩 ）

第2部 総合討論

15：50 コメント
高橋 一彦（神戸市外国語大学准教授）

16：05 総合討論
（司会）岡田 正則（日本学術会議連携会員、早稲田大学大学院法務研究科教授）
大西 楠（駒澤大学法学部講師）

17：55 閉会挨拶
佐藤 岩夫*（日本学術会議第一部会員、東京大学社会科学研究所教授）

18：00 閉会

9. 関係部の承認の有無：第一部承認

（*印の登壇者は、主催分科会委員）

(提案 15)

公開シンポジウム「学問の消滅と生成の系譜学：現場から融合とは何かを考えるために」の開催について

1. 主 催：日本学術会議若手アカデミー若手による学術の未来検討分科会、若手科学者ネットワーク分科会
2. 共 催：なし
3. 後 援：なし
4. 日 時：平成28年7月10日（日）13：00 ～ 17：00
5. 場 所：日本学術会議講堂
6. 分科会の開催：開催予定あり
7. 開催趣旨：

現在、国内外を問わず、学融合や統合など、学問のダイナミックな再編が、ディシプリン、制度、教育の各方面で大きく進んでいる。確かに私たちの抱える課題は多くの場合、どれも領域を横断するもので、複雑である。人間活動による環境改変や気候変動による環境変化は多様な社会変容をもたらし、資本制システムのかつてない深化は、労働や産業構造の急激な変容、同時に進行する貧困や格差のグローバルな構造化とその増大を生み、ICT 技術や生命科学などの人間そのものと人間社会の基盤を大きく変えうる技術の急速な展開により、時空間も、そこに生きる人間存在のありようも大きく変容している。

これらの変容に対して、学問は、具体的にどのように実践的に応答しながら、どのような未来の人間社会を構想し、そのための布石を打つべきか。どのような学問も、人間と人間社会の要請に応えるものであるならば、学融合や統合という名のもとに新しく追求されようとする学問は、何に応え、どのようなものとして成り立とうとしているのだろうか、あるいは成り立つべきなのだろうか。

本シンポジウムでは、この問いに答えるために、別の角度から議論を始めよう。生まれるものがあれば、消えていくものがある。科学研究費の分野細目を持ち出すまでもなく、新たな学問の生成や発展の裏で、消滅していく学問もある。本シンポジウムではまず、学問がどのような背景、社会的要請、政治的力学の中で、生成と消滅を繰り返してきたのかを歴史的に振り返り、学問の生成と消滅の系譜学を明らかにしよう。

消滅まで視野に入れることによって、学問がどのような構想のもとにそれ自身となり、社会にどのような存在理由を与えられて／どのような正当性を獲得して、それ自体として社会の位置を占めているのか／いたのか、が明らかになるであろう。そして、現代社会のリアルを捉え応答しながらも、どのような時

空軸の中でどのように学問は構想されるべきなのか、手探りが続く現在の学問について議論を行い、その答えをフロアと共に見出していきたい。

8. 次 第：

13:00 開会あいさつ

13:10 「学問の生成と消滅の系譜：融合する学問としての農業経済学」（仮題）
藤原 辰史（京都大学人文科学研究所准教授）

13:50 「『社会数学』の生成、消滅と部分的再生」（仮題）
隠岐さや香*（日本学術会議連携会員、広島大学大学院総合科学研究科
准教授）

14:30-14:40 休憩

14:40 「技術と学問のあいだ：実学化する学問とメタ化する科学」（仮題）
中村 征樹*（日本学術会議特任連携会員、大阪大学全学教育推進機
構准教授）

15:20 「融合の先にあるものとは何か：環境学の現在と百年の計」（仮題）
福永 真弓*（日本学術会議連携会員、東京大学大学院新領域創成科
学研究科准教授）

16:00-16:10 休憩

16:10 パネルディスカッション：「生成と消滅のダイナミズムからみる学術
の未来」

16:50 閉会あいさつ
調整中

17:00 閉会

（*印の登壇者は、主催分科会委員）

(提案 16)

公開シンポジウム「高等学校新設科目『公共』にむけて——政治学の立場から」の開催について

1. 主 催：日本学術会議 政治学委員会

2. 共 催：なし

3. 後 援：なし

4. 日 時：平成 28 年 7 月 23 日（土）14：00～17:00

5. 場 所：日本学術会議講堂

6. 分科会の開催：開催予定あり

7. 開催趣旨：

平成 27 年 6 月 17 日、改正公職選挙法案が成立し、選挙権が 18 歳以上になり、新たに約 240 万人が有権者に加わることとなった。彼らは、衆院選や参院選のほか、地方自治体の首長と議会の選挙にも参加し、地域の身近な問題に選挙過程を通じて大きな影響を与えることも可能となった。

本公開シンポジウムは、高校 3 年生の一部も選挙に参加しうる今回の選挙法改正を受け、政治学の立場から、政治学習の高大連携の視点も踏まえつつ、「主権者」教育を含む市民教育の意義を広く政治参加という文脈で、公民・市民、国際比較、地域の各観点から問題を提起し、高等学校の新教科となる「公共」を考えていくにあたっての知識交換の場としたい。

8. 次 第（予定）

14：00 挨拶・趣旨説明

河田 潤一*（日本学術会議第一部会員、神戸学院大学教授）

14：30 報告

苅部 直*（日本学術会議第一部連携会員、東京大学大学院法学政治学研究科教授）

古城 佳子*（日本学術会議第一部会員、東京大学大学院総合文化研究科教授）

佐々木信夫*（日本学術会議第一部会員、中央大学大学院経済学研究科教授）

西川 伸一*（日本学術会議第一部会員、明治大学政治経済学部教授）

羽場久美子*（日本学術会議第一部会員、青山学院大学大学院国際政治学研究科教授）

15：40～16:00 休憩

16：00 総合討論

司会：

杉田 敦（日本学術会議第一部会員、法政大学法学部教授）

コメンテーター：

未定（2名予定）

17：00 閉会

9. 関係部の承認の有無：第一部承認

（*印の登壇者は、主催分科会委員）

(提案 17)

公開シンポジウム「自己を知る脳・他者を理解する脳～融合的アプローチによる社会脳研究の魅力」(仮題)の開催について

1. 主 催：日本学術会議心理学・教育学委員会脳と意識分科会、基礎医学委員会神経科学分科会、臨床医学委員会脳とところ分科会
2. 共 催：日本脳科学関連学会連合(調整中)
3. 後 援：日本ワーキングメモリ学会
4. 日 時：平成 28 年 9 月 10 (土) 13:00～17:00
5. 場 所：日本学術会議講堂
6. 分科会の開催：開催予定あり

7. 開催趣旨：

日本学術会議心理学・教育学委員会脳と意識分科会、基礎医学委員会神経科学分科会、臨床医学委員会脳とところ分科会では、今回、3 分科会合同で、第 10 回公開シンポジウム「自己を知る脳・他者を理解する脳～融合的アプローチによる社会脳研究の魅力」(仮題)を企画した。この合同シンポジウムは、学術会議の第一部と二部が連携し平成 19 年以降毎年実施してきたシンポジウムである。

デカルトは「我思うゆえに我あり」という命題に自己認識の力を見いだした。本シンポジウムでは、これを「我思うゆえに他者(社会)あり」と拡張することで、社会的存在としての脳、つまり自己と他者を結ぶ脳の働きを「融合的社会脳」の視点から展望する。3 分科会の委員などから演者を選択し、人文社会科学、脳科学や情報科学が協調して新たに創出しつつある「融合的社会脳」の先端研究を倫理、経済、美学から認知ロボット工学まで、さらに動物の社会脳、発達障害やうつなどの社会適応障害まで「自己と他者」を軸とした「融合的社会脳」研究の未来展望をおこない、その魅力について語る。国民的関心の高い社会と脳のかかわりを自己認知、他者理解や自他協調の脳内メカニズムを通して考え、健全な社会性を育む脳のはたらきを捉えることで、教育や社会に資する最新のメッセージを発信したい。

8. 次 第：

13:00 開会のあいさつ

苧阪 直行*(日本学術会議連携会員、京都大学名誉教授、日本学士院会員)

13:05

挨拶 (調整中)

13:10-14:10 融合的社会脳研究からみた「自己と他者」—先端人文社会科学、脳科学と情報学の接合

司会：

苧阪満里子*（日本学術会議第一部会員、大阪大学脳情報通信融合研究センター教授）

演者1：「融合社会脳科学の展望—脳の中の自己と他者」（仮題）

苧阪 直行*（日本学術会議連携会員、京都大学名誉教授、日本学士院会員）

演者2：「乳幼児の自己と他者の心の発見—認知ロボット工学から考える社会脳の芽生え」（仮題）

長井 志江（大阪大学工学研究科特任准教授）（調整中）

14:10-15:10 動物の社会脳からみた「自己と他者」

司会：

岡部 繁男*（日本学術会議第二部会員、東京大学大学院医学系研究科神経細胞生物学分野教授）

演者3：「マカクザルを用いた自己と他者の研究」（仮題）

磯田 昌岐（関西医科大学医学部生理学第二講座准教授）（調整中）

演者4：「小型魚類を用いた動物の社会性の研究」（仮題）

岡本 仁（国立研究開発法人理化学研究所 脳科学総合研究センター シニア・チームリーダー）（調整中）

休憩＜休憩 20 分＞

15:30-16:30 発達障害とうつからみた「自己と他者」

司会：

山脇 成人*（日本学術会議第二部会員、広島大学大学院医歯薬保健学研究院精神神経医科学教授）

演者5：「発達障害の早期発見と早期介入支援」（仮題）

神尾 陽子（日本学術会議第二部会員、国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所部長）（調整中）

演者6：「自己の脳を知ってうつ病を治す：ニューロフィードバック治療」（仮題）

岡本 泰昌（広島大学大学院医歯薬保健学研究院准教授）

17:00 閉会

9. 関係部の承認の有無：第一部承認、第二部承認

（*印の登壇者は、主催分科会委員）

(提案18)

公開シンポジウム「昆虫の社会と行動」の開催について

1. 主 催：日本学術会議心理学・教育学委員会・基礎生物学委員会・統合生物学委員会合同 行動生物学分科会、農学委員会 応用昆虫学分科会
2. 共 催：国際社会性昆虫学会日本地区会
3. 後 援：なし
4. 日 時：平成28年9月25日（日）13：30～17：50
5. 場 所：日本学術会議講堂
6. 分科会の開催：開催予定あり
7. 開催趣旨：
近年、昆虫の社会や行動そしてその背後にある認知機能、神経機構について精力的な研究が進んでいる。
本シンポジウムでは、これらの動向について国内外から第一線で活躍している研究者を招へいし、最新の研究成果をわかりやすく紹介するとともに、今後の昆虫を対象とした行動生物学の展望について議論する。
8. 次 第：
13：30 開会の挨拶
辻 和希*（日本学術会議連携会員、琉球大学農学部亜熱帯農
林環境科学科教授）
13：40 閉じて開く意識を生物集団に見出す
郡司 幸夫（早稲田大学理工学術院教授）
14：10 ミツバチの分業社会を支える脳内遺伝子発現の調節
佐々木哲彦（玉川大学大学院脳科学研究科教授）
14：40 昆虫から学ぶ「進化のデザイン」（仮題）
長尾 隆司（金沢工業大学人間情報システム研究所教授）
15：10－15：30 休憩
15：30 アリの社会性行動を制御する神経メカニズム
古藤 日子（東京大学大学院薬学系研究科助教）
16：00 Sociobiology of Ants（仮題）
Jae Chun Choe（韓国国立生態院所長）
16：30－16：40 休憩

16：40 総合討論

(司会) 岡ノ谷一夫* (日本学術会議連携会員、東京大学大学院総合文化研究科教授)

(コメンテーター)

粕谷 英一* (日本学術会議連携会員、九州大学理学研究院准教授)

小野 正人* (日本学術会議連携会員、玉川大学農学部生物資源学科教授・農学部長・農学研究科長)

友永 雅己* (日本学術会議連携会員、京都大学霊長類研究所准教授)

浅間 一* (日本学術会議連携会員、東京大学大学院工学系研究科教授)

17：40 閉会の挨拶

長谷川寿一* (日本学術会議連携会員、東京大学総合文化研究科教授)

17：50 閉会

9. 関係部の承認の有無：第二部承認

(*印の登壇者は、主催分科会委員)

(提案 19)

公開シンポジウム「Progress of International Cooperation for Nutritional Sciences」の開催について

1. 主 催：日本学術会議 農学委員会・食料科学委員会合同 IUNS 分科会
2. 共 催：公益社団法人日本栄養・食糧学会
3. 後 援：なし
4. 日 時：平成 28 年 5 月 14 日（土）14：40～16：40
5. 場 所：武庫川女子大学中央キャンパス（兵庫県西宮市）
6. 分科会の開催：開催予定あり

7. 開催趣旨：

栄養科学や食料科学における国際的な協力の重要性が益々高まっている。IUNS（International Union of Nutritional Sciences：国際栄養科学連合）の4年に一度の大会である International Congress of Nutrition（ICN）の次回開催の会長である Carrera 博士、IUNS の下部組織である Federation of Asian Nutrition Societies（FANS）の次回大会の会長である Hardinsyah 博士を招き、またその次の ICN（東京、2021 年）の準備責任者である加藤久典博士も演者とするシンポジウムを企画した。それぞれから各国が抱える問題点や先端性、国際協調の可能性などについて講演していただき、栄養や食料の分野での世界的な動向を市民に伝えることを目的とする。

8. 次 第：

（座長）

武見ゆかり*（日本学術会議特任連携会員、女子栄養大学栄養学部教授）

下村 吉治（名古屋大学大学院生命農学研究科教授）

14：40 はじめに

清水 誠*（日本学術会議第二部会員、東京農業大学応用生物科学部教授）

14：50-15：20

“Nutrition in Argentina”(仮)

Dr. Mabel Carrera (Ministry of Health, President of the 21st IUNS-ICN (International Congress of Nutrition) 2017) アルゼンチン

15：20-15：50

“Anemia and Micronutrients Deficiencies in Indonesia, and Strategies to Overcome”

Dr. Hardinsyah (Bogor Agricultural University, Chair, Organizing Committee of the 13th ACN (Asian Congress of Nutrition) 2019) インドネシア

15 : 50-16 : 20

“Rapid Transition of Molecular Nutrition by Innovating Concepts and Technologies” (仮)

加藤 久典* (日本学術会議連携会員、東京大学総括プロジェクト機構特任教授、Chair, the Preparation Committee of the 22nd IUNS-ICN 2021)

16 : 20 おわりに

下村 吉治 (名古屋大学大学院生命農学研究科教授)

16 : 40 閉会

9. 関係部の承認の有無：第二部承認

(*印の登壇者は、主催分科会委員)

(提案 20)

公開シンポジウム「パリ協定を踏まえた今後のエネルギー・温暖化対策のあり方」の開催について

1. 主 催：日本学術会議 総合工学委員会 エネルギーと科学技術に関する分科会
2. 共 催：一般社団法人エネルギー・資源学会
3. 後 援：一般社団法人日本エネルギー学会（他調整中）
4. 日 時：平成28年5月18日（水） 13：00～17：20
5. 場 所：日本学術会議講堂 外2室
6. 分科会の開催：開催予定あり

7. 開催趣旨：

2015年パリで開催された第21回国連気候変動枠組条約締約国会議（COP21）において、2020年以降の気候変動対応の国際枠組みとなるパリ協定が合意された。パリ協定では、全球平均気温上昇を産業革命以前比で2℃未満に十分に抑える、また1.5℃未満も追求する、さらには21世紀末に温室効果ガス排出量を実質ゼロにする、といった長期目標も合意され、長期的に大幅な排出削減をより一層進めていく必要性が高まっている。一方、それに先立ち、日本政府は、約束草案として2030年に2013年度比26%削減するという目標を国連事務局に提出した。その目標値において基礎となった政府エネルギーミックスにおいては、大幅な省エネルギー、省電力が想定されている。省エネルギーをいかに実現していくかは、排出削減の実効性のために、またそれに続く長期的な目標達成への道においても極めて重要になる。そこで本シンポジウムは、合意されたパリ協定で目指すこととなった排出削減目標をよく理解し、その上で、省エネルギー対策をはじめとした大きな挑戦にあたり、その課題とそれを実現していくための機会について議論を行うことで、より有効な省エネルギー、温暖化対策を見出すことを目的に開催する。

8. 次 第：

13：00 開会あいさつ

鈴置 保雄*（日本学術会議第三部会員、名古屋大学大学院工学研究科教授）

13：05 我が国のエネルギー・温暖化対策（課題提起）

山地 憲治*（日本学術会議連携会員、公益財団法人地球環境産業技術研究機構理事・研究所長、東京大学名誉教授）

13：20 省エネルギーをめぐる課題と機会（経済的視点から）

- 野村 浩二（慶応義塾大学産業研究所准教授）
- 13：45 省エネルギーをめぐる課題と機会（政策の事後評価）
木村 宰（一般財団法人電力中央研究所主任研究員）
- 14：10 省エネルギーをめぐる課題と機会（長期エネルギー需給見通しの課題）
杉山 大志（一般社団法人電力中央研究所上席研究員）
- 14：35 約束草案の国際的な位置づけと長期排出経路
秋元 圭吾*（日本学術会議連携会員、公益財団法人地球環境産業
技術研究機構システム研究グループリーダー）
- 15：00 気候変動影響、気温上昇目標と約束草案との関係性
江守 正多（日本学術会議連携会員、国立環境研究所地球環境研
究センター 気候変動リスク評価研究室室長）
- 15：25－15：40 （ 休憩 ）
- 15：40 総合討論
（司会）山地 憲治*（日本学術会議連携会員、公益財団法人地球環境産業
技術研究機構理事・研究所長、東京大学名誉教授）
（コメンテーター）
野村 浩二（慶応義塾大学産業研究所准教授）
杉山 大志（一般財団法人電力中央研究所上席研究員）
秋元 圭吾*（日本学術会議連携会員、公益財団法人地球環境産業
技術研究機構システム研究グループリーダー）
江守 正多（日本学術会議連携会員、国立環境研究所地球環境研
究センター気候変動リスク評価研究室 室長）
小宮山涼一（東京大学大学院工学系研究科准教授）
- 17：15 閉会あいさつ
調整中
- 17：20 閉会

9. 関係部の承認の有無：第三部承認

（*印の登壇者は、主催分科会委員）

(提案 2 1)

公開シンポジウム「新しい展開を目指す化学・物理系薬学領域の研究」の開催について

1. 主 催：日本学術会議 薬学委員会 化学・物理系薬学分科会、化学・生物系薬学分科会
2. 共 催：公益社団法人日本薬学会
3. 後 援：なし
4. 日 時：平成 28 年 5 月 20 日（金）13：00 ～ 17：10
5. 場 所：日本学術会議講堂
6. 分科会の開催：開催予定あり

7. 開催趣旨：

医薬品産業は、わが国にとって非常に重要な位置づけにあり、それに発展、充実に対応するために、日本学術会議では、革新的医薬品創出のための基盤及び応用研究の推進、その領域の発展に貢献できる人材の育成のための諸方策を推進することを目的として活動してきたが、近年新薬の承認数が減少しており、これまでの創薬アプローチでは新薬の創出が極めて難しい状態になっているところ。

そこで、この度、この領域の更なる発展のために、それを支える主要な領域の一つである化学・物理系薬学を中心とした研究の現状を把握し、この領域での研究のあり方について広く意見交換を行い、その方向性を議論することを目的として、シンポジウム「新しい展開を目指す化学・物理系薬学領域の研究」を企画するものである。専門家の皆様にご講演いただき、議論を深めることにより、革新的医薬品の創出に向けての薬学研究の発展、次世代を担う優れた薬学研究者の育成を推進していくことを社会に向けて発信できることが期待される。

8. 次 第：

13：00 開会挨拶

長野 哲雄*（日本学術会議第二部会員、独立行政法人医薬品医療機器総合機構理事）

太田 茂*（日本学術会議連携会員、公益社団法人日本薬学会会頭、広島大学大学院薬学研究科教授）

- 座長：嶋田 一夫*（日本学術会議連携会員、東京大学大学院薬学研究科教授）
寺田 眞浩*（日本学術会議連携会員、東北大学大学院理学研究科教授）
- 13：10 「ポスト NGS 創薬研究：統合生物学による創薬パラダイムシフト」
 長洲 毅志 （国立研究開発法人科学技術振興機構バイオサイエンス
 データベースセンター統合化推進プログラム研究総括）
- 13：45 「生体分子間の非共有結合相互作用に関する物理的化学的研究」
 白川 昌宏 （京都大学大学院工学研究科教授）
- 14：20 「計算生命科学と実験化学の協同創薬研究による革新的医薬品の創出
 をめざして」
 福西 快文 （国立研究開発法人産業技術総合研究所臨海副都心セン
 ター創薬分子プロファイリング研究センター 3D 分子
 設計チーム研究チーム長）
- 14:55－15：15 （ 休憩 ） 休憩

- 座長：齊藤 和季*（日本学術会議連携会員、千葉大大学院薬学研究院教授）
永次 史*（日本学術会議連携会員、東北大学多元物質科学研究所教授）
- 15：15 「薬用植物資源科学の展開」
 野口 博司（静岡県立大学名誉教授）
- 15：50 「感染症分野における創薬促進ストラテジー — “One Health” のもと
 に進められる国際協調—」
 舘田 一博 （東邦大学大学院医学研究科教授）
- 16：25 「非環状骨格型人工核酸を用いた DNA の機能的再インストール」
 浅沼 浩之 （名古屋大学大学院工学研究科教授）
- 17：00 閉会挨拶
佐治 英郎*（日本学術会議連携会員、京都大学大学院薬学研究科教授）

9. 関係部の承認の有無：第二部承認

（*印の登壇者は、主催委員会委員）

(提案 2 2)

公開シンポジウム「素材の循環使用に関するシンポジウム」の開催について

1. 主 催：日本学術会議材料工学委員会材料の循環使用検討分科会、総合工学委員会持続可能なグローバル資源利活用に係る検討分科会
2. 共 催：一般社団法人日本鉄鋼協会、公益社団法人日本金属学会、一般社団法人資源素材学会、公益社団法人高分子学会、公益社団法人セラミック協会
3. 後 援：なし
4. 日 時：平成 28 年 5 月 23 日（月）13:00～17:00
5. 場 所：日本学術会議講堂
6. 分科会の開催：開催予定あり

7. 開催趣旨：

2015 年（平成 27 年）12 月に EU から循環経済の確立を宣言する政策パッケージを提出された。素材全体の循環使用を進めるために大きな行動を起こしたと言える。基本的には環境対応を行いながら、経済の活性を進めることを意図している。本シンポジウムではそのような動きを見ながら循環経済の学術的意義ならびに我が国の取るべき対応について議論を行う。これらの議論を通し、資源供給と環境を考慮しながら将来の我が国の産業のグランドデザインを素材・材料供給から見渡すことを行う。合わせて素材供給とエネルギーの関係についても議論を行い、素材供給の将来を展望する。

8. 次 第：

講演

- 13:00-13:30 「UNEP 国際資源パネルと EU の資源効率・循環経済」
森口 祐一*（日本学術会議連携会員、東京大学工学研究科教授）
- 13:30-14:00 「素材循環のキーテクノロジーとしての物理選別」
大和田秀二*（日本学術会議連携会員、早稲田大学創造理工学研究科教授）
- 14:00-14:30 「高分子材料の供給と循環使用」
加茂 徹（国立研究開発法人産業技術総合研究所環境管理研究部門資源精製化学研究グループ上級主任研究員）

14:30-14:40 休憩

14:40-15:10 「鉄鋼の循環使用」

長坂 徹也*（日本学術会議連携会員、東北大学工学研究科教授）

15:10-15:40 「非鉄材料の循環使用」

中村 崇*（日本学術会議第三部会員、東北大学多元物質科学研究所教授）

15:40-17:00 素材の循環利用に関するパネルディスカッション

司会 中村 崇*（日本学術会議第三部会員、東北大学多元物質科学研究所教授）

パネラー

黒藪 誠（経済産業省製造産業局非鉄金属課係長）

谷貝 雄三（環境省廃棄物・リサイクル対策部企画課リサイクル推進室長補佐）

嶋村 高士（トヨタ自動車㈱環境部担当部長）

市川 芳明（(株)日立製作所知的財産本部国際標準化推進室主管技師長）

9. 関係部の承認の有無：第三部承認

（*印の登壇者は、主催分科会委員）

(提案 23)

公開シンポジウム「人類 1000 万年史～類人猿から日本人まで～」の開催について

1. 主 催：日本学術会議 基礎生物学委員会・統合生物学委員会合同 自然人類学分科会
2. 共 催：日本人類学会、日本霊長類学会
3. 後 援：なし
4. 日 時：平成 28 年 6 月 25 日（土）13：00～16：30
5. 場 所：東京大学理学部 2 号館大講堂
6. 分科会の開催：開催予定あり

7. 開催趣旨：

われわれの祖先が、森に住む類人猿から平原に暮らす初期人類になり、さらには文化を発達させアフリカから世界中に拡散して現在の日本人に至るまで、どのように進化してきたかを、最新の研究成果に基づいて易しく解説する。それにより、広い人類史的観点からわれわれ自身を理解し、近未来の人類の在り方を考える基礎資料を提供する。

8. 次 第：

司会：河内まき子*（日本学術会議連携会員、国立研究開発法人産業技術総合研究所招聘研究員）

13：00～13：05 趣旨説明

斎藤 成也*（日本学術会議連携会員、大学共同利用機関法人情報・システム研究機構国立遺伝学研究所集団遺伝研究部門教授）

13：05～13：25 遺伝子から類人猿の社会を見る

村山 美穂*（日本学術会議連携会員、京都大学野生動物研究センター教授）

13：25～13：45 類人猿はなぜ熱帯雨林を出られなかったのか

山極 壽一*（日本学術会議第二部会員、京都大学総長）

13：45～14：05 ラミダスからみたヒトと類人猿の共通祖先像

諏訪 元*（日本学術会議連携会員、東京大学総合研究博物館教授）

14：05～14：25 休憩（20 分）

14：25～14：45 アフリカからユーラシアにひろがった原人たち

馬場 悠男*（日本学術会議連携会員、独立行政法人国立科学博物館名誉研究員）

- 14 : 45～15 : 05 ネアンデルタール人の脳と行動
近藤 修 (東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻准教授)
- 15 : 05～15 : 25 日本人の起源と成立
斎藤 成也* (日本学術会議連携会員、大学共同利用機関法人情報・システム研究機構国立遺伝学研究所集団遺伝研究部門教授)
- 15 : 25～15 : 35 休憩 (10 分 : 机配置換え)
- 15 : 35～16 : 25 総合討論
モデレータ :
斎藤 成也* (日本学術会議連携会員、大学共同利用機関法人情報・システム研究機構国立遺伝学研究所集団遺伝研究部門教授)
- 16 : 25～16 : 30 閉会の挨拶
馬場 悠男* (日本学術会議連携会員、独立行政法人国立科学博物館名誉研究員)

9. 関係部の承認の有無 : 第二部承認

(*の登壇者は、主催分科会委員)

(提案 24)

公開シンポジウム「フロンティアを目指す、サイエンスとアートの開催について」(仮題)

1. 主 催：日本学術会議 総合工学委員会・機械工学委員会合同 フロンティア人工物分科会
2. 後 援：国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構(JAXA)、国立研究開発法人海洋研究開発機構(JAMSTEC)(内諾済)、その他に全国紙新聞各社に打診・依頼中
3. 日 時：平成28年6月27日(月)、28日(火)(2日間)
4. 場 所：日本学術会議講堂 外3室
5. 分科会の開催：開催予定あり

6. 開催趣旨：

サイエンスは、human science, social science, medical science, natural science の広い領域にわたる。一方で、工学や、医療、文学や芸術に共通するキーワードは アート(Art) である。アートは、技量、技巧でありつつも、「Artificial」という人工物を作ることを意味し、工学(Engineering)を示す面もある。

フロンティアを、宇宙、深海という狭い範囲での目的地(destination)ではなく、学術が目指すべき、社会・人類の行く末をも含めた広義のフロンティアと位置づけ、サイエンスとアートが、フロンティアを知り、またそこへ到達させるうえで果たす役割を、再確認することを目指す。

人間、社会、自然に関わる未踏の地であるフロンティアを見据えて、それらが何であるか、またそれらに取り組むべき行動を追求することは、いわば学術の果たすべき本質的な責務である。しかるに、昨今の国内外の経済情勢や安全保障情勢は、人工的な手段(アート)を至近距離で展開する傾向を助長し、フロンティアを見失いがちである。

理学と工学は、フロンティアたる未踏の「自然」の到達領域が何であるか(what)、及び未踏の地に至る方法(how)を追求する、密接な関係もつ両輪である。それらは、サイエンスとアート(人工的な技量、技巧)というべき関係にある。これらを追求すべき事由や環境を認識することは、実は、理工学分野(自然科学 第3部)だけの課題ではなく、人文科学、社会科学分野(人間と社会に関わる分野 第1部)においても、同様の構造を持ち、医学・薬学分野(第2部)においても同様であり、双対な構造を構築している。いわば、学術会議全体が取り組んでいる活動の総体であるとも言える。したがって、各々の分野において、追求・推進すべき事由や環境を認識しようとする活動とは、実は、人文社会科学、医学・薬学、自然科学という各構造での認識を相互に鏡のように映して見るこ

とによって、新たな段階に到達することとも言える。各専門領域に特化したシンポジウムだけでは、この新たな認識の段階に到達することは難しい。

平成23年に、本分科会は、「人類の持続性確保に貢献するフロンティア人工物科学技術の推進」の提言を発信したが、学術会議査読時のコメントとして、人文社会科学面からも推進すべき理由を掲げるべき、との意見を受け、本分科会としては、平成29年に発信を計画している提言の改訂版において、これを記述するべく検討を重ねてきたところである。このために、本分科会は、第一部、第二部の会員をも委員として構成しており、これまでも既に、分科会の機能として、「部」を超えた検討を実際に行なってきた。

本分科会では、今期の活動として、提言改訂に向けて、前回提言に関わるアクションへの回答を得るために、フロンティア人工物ないし理工学(第三部)の範囲を超えて、第一部、第二部の分野をも含んだシンポジウムを開催して、フロンティア人工物分野を人文社会科学面からとらえ、推進すべき立ち位置、環境に関する意見の抽出を行うことを計画し、ここにシンポジウム開催計画を提出するものである。

7. 次 第：

十分な討論を可能とさせるため、モデレーターと登壇者 1ないし2名による対談形式を採用し、会場参加者との間で十分な議論の時間を設ける。モデレーターは、学術会議 本分科会ないし会員や、有識者として全国規模の新聞社、放送、メディアの論説委員がつとめ、対談を、シンポジウムのテーマに添うよう、ガイドする形式をとる。

○ 6月27日(月)(調整中)

10:00-10:10 開会挨拶

川口淳一郎* (日本学術会議第三部会員、国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究所宇宙飛翔工学研究系教授・シニアフェロー)

10:10-11:30 「美とアート」

井川陽次郎 (読売新聞論説委員):モデレーター

相澤 清晴 (日本学術会議連携会員、東京大学情報学環・工学部教授)

久保 友香 (東京大大学院情報理工学系研究科特任研究員)

11:35-12:55 「アーカイブ論」

吉田 典之 (読売新聞論説委員):モデレーター

森 信介 (京都大学大学院情報学研究科准教授)、

森村 泰昌 (京都市立芸術大学芸術資源研究センター特別招聘研究員)

13:10-14:30 「ロボットは人間に代われるか?～介護と廃炉現場で見たもの」(仮題)

斎藤 泉 (TBS 解説委員):モデレーター

吉田 和也 (東北大学工学部工学研究科教授)

結城 康博 (淑徳大社会福祉学科教授)

14:35-15:55 「人工知能と霊長類 - 群と群衆行動・心理 -」(仮題)

長辻 象平 (産経新聞論説委員):モデレーター

松沢 哲郎（日本学術会議連携会員、京都大学霊長類研究所教授）

松尾 豊（東京大学大学院工学系研究科技術経営戦略学専攻消費インテリジェンス寄付講座共同代表・特任准教授）

16:00-17:20「地球外生命を探る 人類の未来」（仮題）

観山 正見（日本学術会議第三部会員、広島大学学長室特任教授）：モデレーター

高井 研（国立研究開発法人海洋研究開発機構深海・地殻内生物圏研究分野分野長）

斎藤 成也（日本学術会議連携会員、国立遺伝学研究所教授）

○ 6月28日（火）（調整中）

10:00-10:10「学術会議のフロンティアへの取組み」（仮題）

向井 千秋*（日本学術会議第二部会員・副会長、東京理科大学副学長）

10:10-11:30「自動運転と未来社会」（仮題）

大牟田 透（朝日新聞論説委）：モデレーター

新 誠一（日本学術会議連携会員、電気通信大学情報理工学研究科知能機械工学専攻教授）

森地 茂（政策研究大学院大学政策研究センター所長）

11:35-12:55「物流と未来社会」（仮題）

鈴木 真二*（日本学術会議連携会員、東京大学大学院工学系研究科教授）：モデレーター

矢野 裕児（流通経済大学流通情報学部教授）

西村 悦子（神戸大学海事科学部大学院海事科学研究科准教授）

13:10-14:30「イノベーション、科学技術と教育」（仮題）

鈴木 款（フジテレビ解説委員）：モデレーター

柘植 綾夫*（日本学術会議連携会員、公益社団法人科学技術国際交流センター会長）

中原 淳（東京大学大学総合教育研究センター准教授）

14:35-15:55「文系廃止論」（仮題）

滝 順一（日本経済新聞社論説委員）：モデレーター

吉見 俊哉（日本学術会議連携会員、東京大学大学院情報学環教授）

永野 博（政策研究大学院大学教授）

16:00-17:20「公海・宇宙資源と所有 - 米国宇宙法 -」（仮題）

川口淳一郎*（日本学術会議第三部会員、国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究所宇宙飛翔工学研究系教授・シニアフェロー）：モデレーター

中谷 和弘*（日本学術会議第三部会員、東京大学大学院法学政治学研究科教授）

宮本 英昭（東京大学総合研究博物館准教授）

17:20-17:30 閉会挨拶、閉会

8. 関係部の承認の有無：第三部承認

（*印の登壇者は、主催分科会委員）

(提案 26)

公開シンポジウム「イノベーションプラットフォームとしてのバイオマテリアル」の開催について

1. 主 催：日本学術会議 材料工学委員会 バイオマテリアル分科会

2. 共 催：日本バイオマテリアル学会

3. 後 援：未定

4. 日 時：平成28年11月22日（火）9：30～12：00

5. 場 所：福岡国際会議場

6. 分科会の開催：開催予定なし

7. 開催趣旨：

バイオマテリアルの実用化を促進するために、臨床からの情報の獲得、バイオマテリアルと再生医療の関係や重要性の確認、バイオマテリアル学会会員に向けた学術会議バイオマテリアル分科会の活動伝達を目的として開催する。

8. 次 第：

座長：埴 隆夫*（日本学術会議連携会員、日本バイオマテリアル学会会長、東京医科歯科大学生体材料工学研究所教授）

演題・演者：

(1) 「臨床家からみた先端医療（再生治療）におけるバイオマテリアルの重要性と期待」

磯貝 典孝（近畿大学医学部形成外科教授）

(2) 「バイオマテリアルの再定義とイノベーション応用の可能性」

田畑 泰彦*（日本学術会議連携会員、京都大学再生医科学研究所教授）

(3) 「AMED が推進するバイオマテリアル関連の研究開発について」

阪本 剛（国立研究開発法人日本医療研究開発機構産学連携部医療機器研究課調査役）

(4) 「医療機器の製品化に対するバイオマテリアルの貢献」

妙中 義之（国立循環器病研究センター研究開発基盤センター長）

(5) 総合討論

9. 関係部の承認の有無：第三部承認

(*印の登壇者は、主催分科会委員)